

目次

キャンペーンの経緯

パンデミックに逆らったの原子力反対運動

原発の影に覆われた競技

国際キャンペーン

「東京2020・放射能オリンピック」

東京での夏のオリンピック競技会は一年延期後、様々な反対の動きがあったにも拘わらず、開催され、2011年3月に福島を襲った地震・津波・原発事故という三重災害から10年後の今、それも過去のものとなりました。

放射能オリンピック東京2020に対する私たちのキャンペーンは2年前に開始され、私達はIOCや日本政府に対して福島市での野球やソフトボール試合、そして福島の放射能汚染地区での聖火リレーをやめるように要求しました。

日本政府は、この競技大会を「復興五輪」と宣言しました、これは世界に向けて汚染地区に日常が戻ったという表現の試みでした。しかしながら現地の人たちには今日まで日常は存在していません。

パンデミックに逆らったの原子力反対運動

私達のキャンペーンの中心的意図は放射能に悪影響を受けている日本国民のみなさまへの連帯です。以前は54基が稼働していた日本で、市民の反対運動や裁判によって現在、9基の原発だけが稼働していることには勇気づけられます。しかしながら、日本でも原子力が気候変動への回答であるかのような嘘が広まっています。政府はさらなる原子炉を稼働させる計画をしています。

また、2022年から開始される破壊原発からの放射性冷却水・海洋放出にともなう健康への悪影響は政府によって無視され、このことで海洋保護のための国際条約の違反も厭わない方針です。

私達のキャンペーンは国内外でネットワークを広げることが可能で、そのために私達のニュースレター、インターネットサイト、とチラシがご利用できます。キャンペーンを通して成立したコンタクトは私達が今後も反原発運動を行う時に助けになることでしょう。

2020年にローザンヌのIOC本部前で国際的連合団体によって行われた共同のデモはこのネットワークの表現でした。

2020年3月に私達の署名リストをベルリンの日本大使館に渡す作業は中止されました、そのころヨーロッパにもコロナが到達していたのです。そしてオリンピック大会も1年延期されました。パンデミックは世界中の世論を制覇しました。オリンピック競技の報道についても例外ではありません。感染度が上昇するにつれて、日本での競技自体、最後まで、その是非が問われ続けました。

福島における放射能の健康への悪影響は重要な問題から外れてしまいました。しかし2021年3月11日の放射能大災害10周年日にはより大きな反響を起こしてくれました。フクシマに関する国際シンポジウムにおいて私達はオリンピック競技との関連性を公に効果的に引き上げることができたのです。

2021年の聖火リレーの開始日に合わせて、IPPNWはドイツの協賛パートナーである団体、さよならニュークス・ベルリンや、アウスゲシュトラートと共同で、今年の3月24日に、「放射能汚染地区でのオリンピック競技反対」というモットーで日本大使館に10890件の署名を渡すことができました、そのうち10パーセントの署名は外国からでした。

ドイツ・オリンピック・スポーツ連盟とのさらなる意見交換後、連盟は私達の、フクシマからの健康への悪影響についての批判的情報をオリンピックチームのアスレートに伝えていきます。私達の共同作業の素晴らしい成果です！

原発の影に覆われた競技

IOCは日本での原爆投下についての態度のせいで公的に批判されています。IOCバッハ会長は8月6日の広島追悼の日に、広島市長や原爆投下の生存者が希望した、会場での黙祷を拒否しました。バッハの態度は日本の世論でもオリンピック精神に反すると焼き印を押されています。

この競技会は私達IPPNWにとって最も重要なテーマで終わりました。原爆使用の恐ろしい影響と原発事故による大災害の影響は人間を脅かす同じ技術の異なる面です。この両方が日本の現実を今日まで形成しています。

私どものキャンペーンを支援して下さった皆さま御一同に御礼申し上げます。

アレックス・ローゼン博士

イエルク・シュミット博士

パウル=マリー・マニエール